

友人・知人 各位

立秋もとうに過ぎて、江戸の昔に武蔵野台地の開墾のために開削されて我が家の脇を流れる小平用水を渡って、元気に鳴く虫の声も聞こえて来ます。ようやく朝夕は過ごしやすくなりましたが、まだしばらく残暑が続くかと思えます。夏の疲れも出る頃です。お体に気をつけ元気に活躍されることを祈って、元気なだけ取り柄の甘鯛(Tile Fish)より、TFネットワーク報19号を送らせていただきます。

### ◎再び「緑」の黄土高原へ

かつての駒場の中国語クラスの劣等生にして毛沢東主義者の、30年来の思いがけないこの3月末ようやく北京へ飛ぶ。更に夜汽車で西へ3百キロ、山西省の省都大同へ。日本の国土の1.5倍の面積を誇る黄土高原の中心へ。そこを拠点に、見渡す限り黄土色の世界を過か北へ南へとバスに揺られ、木を植える真似事をしたり、農家に上がり込んで昼食をご馳走になったり、懸空寺や雲崗の石窟を見学したり。敗戦2年目に生まれた私が記憶する秋田の田舎の貧しさにも比べるべくもない極限の貧しさの中で、することもなく日向にたむろしながら明るい表情を失わない農民。わずかに残った草や木の芽さえも羊や馬が食べてしまう黄土色の世界。立ったままでは一周できない猫の額ほどもない家の周りに生えてくる草をむしっては雑草の生命力を呪う、日本の緑の豊かさとの違い。多分世界でも日本は特殊なのだ。帰途、春先とはいえ青々とした日本の山々を上空遥か見下ろしながら、かの地との余りの落差にもう一度緑の季節に黄土高原へ足を運ぼうと決める。

緑の地球ネットワーク(GEN)のワーキングツアーは年2回。夏のツアーに加えてもらおうと、7月29日から8月5日まで早めの夏休みを取る。春先にはトモロコシの切り株が残るだけだった黄土高原の畑にもヒマワリの花が重い頭をたれ、ジャガ芋も白い花をつけ、トモロコシは天を指して直立している。しかし葉は元気がなく茶色っぽい。年間降水量4百ミリほどだが今年例年に比べても雨が降らず、枯れかかっているのだ。それでも春先には雑草もなかった畑にヒマワリやジャガ芋、トモロコシ、燕麦などが伸び、荒れ地にも草花が咲き、山の頂き近く北斜面を中心にわずかに生える木々の緑も濃くなって、3月に比べると全体的に青々として見える。何となく救われたような感じを覚える。この季節も真っ茶色な地なら植林の可能性など、はなからないのだ。

春のツアーで松の苗を植えたGENの植物園で松を補植し、山頂を目指す。標高千3百mの山を分水嶺で分けた半分、86畝の百年間の使用料を3万円で買ったという。麓から標高差5百mをようやくのことで登る。目の高さでは一様な緑に見えた畑も、山頂から見下ろすと濃淡の縞模様を描く。濃いグリーンはトモロコシ畑、淡いのは耕作放棄地で雑草が生えているのだという。せっかく森を切り開き畑にしても、表土が流されたり栄養分がなくなったりして耕作できなくなったのだ。今回はそんな荒れ地にも松を補植した。粒子が細かく直ぐ水に溶け、雨が降ると流され深い浸食崖を作る黄土であるが、乾燥するとガチガチに固まりなかなかスコップが入らない。雑草もまばらにしか生えていない。そんなところでも健気に根を張るこの春に植えた松の苗。貧困ゆえに森が畑に、畑が荒れ地になり、荒れ地を再び森に変えることで貧困を解決する試みが今始まったのだ。

## ◎余っているのに足りない

貧困ゆえに、増える人間の口にとりあえず入れる物を作るために、煮炊きするために、雨露に当たらないようにするために森が畑になったのだ。だがそこがかって森であったから、森が水をつくるからと言って木を植える訳にはいかない。まして森が炭酸ガスを酸素に変えるなどということは黄土高原の農民にとってどうでもいいことだ。夏エアコンでガンガン冷やし、排気ガスをまき散らして車を走らせ、使い捨ての大量消費のために大量生産して資源を浪費し、炭酸ガスを大気中に放出するのは全く縁遠い生活を彼等はしているのだ。

それにしても「貧しい」。かって親達の時代に秋田の寒村で1升の米を貸し借りしても、貧乏人だから麦を食っても、風呂がないからもらい湯をしても、肉なんかめったに口に入らなくとも、最低限必要な飲む水に困ることはなかった。水瓶では手押しポンプで一緒に汲み上げられたミミズも身をくねらせて泳いでいたが、そんなことさえ気にしなければ。だがここでは水瓶で泳ぐミミズさえいない。春訪ねた石翁村では4キロ離れた下流の村の泉からラバに引かせたドラム缶で水を運ぶ。水洗トイレで1回に流す水が10%、人間が生理的に最低限必要とする水は1日4%ほどという。私たちがお昼をご馳走になった家ではドラム缶一杯の水で親子4人、5日間ほど暮らすという。洗面器に水を張って顔を洗い、口をすすぎ、煮炊きして、たまに洗濯する。風呂などはない。使って余った水をもう一度山羊や馬や鶏などに飲ませる。

昨今日本では作っても売れないから政府が補助金を出して生産設備を廃棄するという。いや当の中国でも工業製品が売れなくて困り、国有企業のリストラを進めようとしている。それなのにこの村では飲む水にさえ事欠き、1日3食の食事のままならない。余っているのに足りない。必要とする人の所に余っている物が届きさえすれば、片方はひもじい思いをしなくて済み、他方は失業の恐怖から解放されお互い幸せになれるのに。金のある所にしか物は行かない。一人当たり年間所得8千円の所に物は行きたくても行けない。まして自分を必要とする人の所まで物は自分で歩いて行くことはできない。その上、元々偏在しているこのお金なるものが、金融危機とやらで日本でも中国でもうまく回らなくなっている。貧しい人間は二重に苦しめられている訳だ。

勿論黄土高原の人々は二重苦に喘いでいるなどとは露思わないかもしれない。何千年も前から先祖代々こんな生活をして来たのだし、毛沢東の政府になってからは飢え死にすることはまずなくなった。1日3食の食事はままならないにしても、飢饉の時は政府が援助してくれる。寒かったり暑かったりしてすることがなければじっとしていればいい。寒い時は日向で暑い時は物陰で、村人は集まってお喋りをしたり、トランプをしたり、本当に楽しそうだ。寒い時も暑い時も朝から晩まであくせく働き、沢山の物に囲まれながらもっと欲しいと願い、たらふく飲み食いしながらダイエットしなくてはと思うストレスの多い暮らしと、全く違った世界がここにはある。

## ◎地球環境とNPOのこれから

そんなGENの黄土高原緑化運動を切り口にNPO（特定非営利法人）新法成立後のNGO（非政府組織）のこれからについて考えてみよう。と団塊政策研究ネットワーク（D-ネット）では連続講座の第2弾を7月に慌ただしく行った。

### ◆貧困と植林

トップバッターのGEN高見事務局長(S41年東大三鷹寮入寮)からは徒手空拳で92年に始め最初は失敗続きの黄土高原の緑化運動であったが、現地の人達と手を携え、日本の学者や技術者のアドバイスも得られるようになって運動が広がり、今では自前の苗木センターや植物園を持つまでになったが、日本の1.5倍もある黄土高原を日本から出掛けて行って全部緑化するのは無理なので現地の人に成功例を示し、技術援助をしてやる気を引き出し、現地の運動として広めて行く。又、貧困ゆえに耕せるところは全て畑にしてしまい森を失った背景もあるので、耕作不能な傾斜地や痩せ地に植林し貧困を克服するのに役立つ形でやらない限り根づかない。だが日本と違って木の経済価値が高いし、中国、特に北京周辺の水不足は深刻で、揚子江の洪水もあり中国政府も緑化に真剣に取り組むようになり、可能性はあると報告があった。

#### ◆NPO法の効用

高見君からは6月にNPOの認証を得たが手続きがややこしいだけで、代表者が団体の債務について無限責任を負わなくて済む様になった点以外メリットがないと指摘があった。この点7月6日に2番手で講演してくれた浅野史郎宮城県知事は、大蔵などの税を徴収する立場からするとNPOに対する寄付金を税法上の損金として扱うことに反対するのはその分税収が減ることになるのでもっともで、一気にそこまで行くよりも段階を踏み、実績を積んで次回の見直し時の課題とした方が良いとのことであった。

#### ◆虫もつかないユーカリもいい

上田信立教大学教授・緑の地球ネットワーク世話人からは秦の始皇帝が万里の長城を築く時にもレンガを焼くなどのために黄土高原の木は切られ、特に明代以降の人口爆発で緑が急激に減った歴史的な背景が語られ、人為的な緑の減少なので植林による緑の回復も可能であるとの指摘があった。桜井尚武林野庁研究普及課首席研究企画官(S40年入寮)からは元々の砂漠を緑化することは無理があるしすべきでもないが、黄土高原のみならず熱帯雨林など人間によって緑が失われた所では緑の回復は可能であり、技術面でも随分研究が進んでいるとのことであった。下草も生えず、虫も寄り付かず一部で異議を唱えられているオーストラリアの固有種でパンダの餌として有名なユーカリによる東南アジアや中国の緑化についても、今ある森を切って植えるのは論外として、10年で成木となりチップとして使えるので経済的に価値があり、日陰を作るのでフタバガキ科のラワン等の幼木を育てるために一次的に植えるのは効果的であるとの指摘は新鮮であった。

#### ◆バージンには税金を!

シンガリを務めていただいた小島敏郎環境庁官房総務課長(S43年入寮、38期寮委員長)の時は市民運動家の豊島直人君(S41年入寮)や最近サラリーマンを始めた井上豊君(S43年入寮)など三鷹寮の仲間が何人も詰め掛け、CO2削減、炭素税等一通りのレクチャーが済んだ後も学生時代そのまま質疑応答が続く。洗濯と掃除、皿洗いを家事分担し、かさばる物の買い出し役も務める私は、いつも西友ストアに牛乳パックを持参して帰りにトイレトーパー(古紙100%、W12ロール30M398円)、ティシュペーパー(牛乳パック100%ティシュ4百枚(5箱)398円)を買うが、バージンパルプ100%のものがそれぞれ百円安く売られているのは割り切れない、材料の段階でその差額にバージンタックスを掛け、環境対策に利用すべきではないかと提案した。これに対して小島君から現在は古紙100%のものもバージンパルプ100%のものもコスト的に違いはなく、客寄せの目玉として後者が安く売られているだけだとの指摘があり議論が沸騰する。

## ◎君はグリーンコンシューマーか？

そこでコストが同じなら古紙100%のものを目玉にする先進的な店はないのだろうかと思っていたところ、最近花小金井の駅前のドラッグストア・イッポン堂で古紙100%、W12ロール30Mのトイレットペーパーを199円で売っていた。すごいと思い、まだ買い置きが残っているのについ手が伸びる。自転車でぶら下げて帰る道すがら、グリーンコンシューマーとして百円高くとも敢えて環境のためにと買っていたのに、突然半額に安くなって複雑な気分が残る。それに店先で牛乳パックを回収した上で398円で古紙100%製品を以前から売っている西友と、イッポン堂の商売敵でバージンパルプ100%のものを298円で売っているマツモトキヨシがどう出るか、新たな興味も沸いてくる。

いずれにしろ古紙の最終処理法としてトイレットペーパーとティシュペーパーは最適である。目玉商品としてであれ、その販売が伸びることは一歩前進である。又、古紙100%製品が目玉商品として売られるのはコスト的にもバージンパルプ100%のものに近づき、客寄せに使えるほど選好度も向上しているということで歓迎すべきことだ。

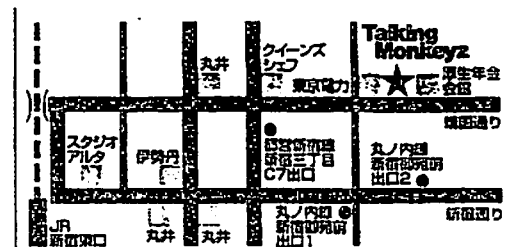
## ◎日中植林協力の夕べ

D-ネット連続講座「地球環境とNPOのこれから」のパートIIとして、黄土高原緑化の現地からの報告と懇親パーティをGENとD-NETの共催で行います。

9月6日の経団連「日中植林協力フォーラム」第1回シンポジウムに来日する祁学峰山西省大同市青年連合会主席と高見GEN事務局長を迎えて、大同市を中心とした黄土高原緑化の現場報告と草の根からの日中友好のこれからについて語り合いたいと思います。

祁学峰氏は緑の地球ネットワークのカウンターパートナーである大同市青年連合会で責任者をこの6年間務めて来ました。この機会に上海などの沿海部とは違った、内陸中国、もう一つの中国について知るいい機会でもあります。奮って御参加下さい。

日時 9月7日(火)PM7時～  
場所 「トーキング・モンキーズ」  
会費 一般4千円、学生3千円  
(飲み食べ放題、酒持ち込み自由)  
連絡先 干場までできればFAXで  
FAX 03-3818-1219



新宿区新宿5-4-1Q7フラットビルB1 ☎03-3355-7299

## ◎真空総理にバキュームされる？甘鯛！

経団連との打ち合わせで高見君が上京するのに合わせ7月2日(金)にD-NETの連続講座初回を設定し、前夜有楽町でNTT再編に合わせて中国との合併事業解消に取り組むNTTインターナショナルの宮脇取締役(S42年入寮)、昨夏大学生の息子さんがGENのワーキングツアーに参加した農水省の小畑審議官(S42年入寮)と4人で一杯やる。37期寮委員長の高見君と38期寮委員長の小生、38期寮委員の宮脇君と小畑君で、何か寮委員会でもやっているようだ。つついグラスを空ける回数が増える。飲み過ぎたか翌朝高見君と連絡がつかないらしくGENの事務局から私の携帯に電話が入る。小淵総理が翌週訪中するに当たって中国での植林協力の話しを聞きたいので、5日(月)11時に官邸に来てくれとのこと。私も予定をやりくりして同行することにします。

高見君と二人で首相官邸の玄関をくぐりながら、こんな筈ではなかった、真空総理にバキュームされるなんて！本当は右手に小銃を握り、左手に赤旗をはためかせて突入するんだ！と危いこと？を考える。打ち合わせが始まると大きなテーブルを挟んでブラウン管で見慣れた総理がいる。2人おいて総理の知恵袋と言われる通産省出身の北村俊昭首相秘書官(S42年入寮)がいる。30余年ぶりだ。昔は僕等が寮委員長だったんだからテーブルの反対側にいたんだ、などと余計なことを考える。

それにしても何でもよく飲み込む総理である。まさか「前科者」の我々までバキュームしてしまうとは。よっぽどの下手物食いか、我々が全くの人畜無害に「成り上がった」か。いずれにしろ、中国の緑化に手を貸すのはいいことだ。小淵総理は泥縄で申し訳ありませんがとこちらの気持ちを見透かしたように言ってから、百億円の日中植林基金を作って毎年10億円ずつ使う。ついてはお金を丸ごと中国にやっても仕方がないので、実際に中国で緑化運動をしているNGOを通して協力したいとのこと。毎年10億円、国民の税金を使うのだ。有効に使われなければ。こちらに異議はない。昨秋の江沢民主席来日の際に経団連が先ず日中植林協力を踏み出し、今又、政府が本腰を入れて取り組むという。その時真っ先に声が掛かるのが高見君の緑の地球ネットワークである。幾つかある日中植林協力のNGOの中で一番実績を上げているらしい。

## ◎女性寮委員長登場す

寮が東大三鷹国際学生宿舎に衣替えし、留学生も含め男女共住の6百人の寮へ倍増。入寮選考権は大学に移る等以前の自治寮とは様変わりしながらも、今も寮委員会は半年交替で続く。学生運動が盛んだった頃は複数の委員長候補が立ち、選対本部を作り、毎晩選挙公報を発行して激しい選挙戦を繰り広げた。私の対立候補は日本社会福祉事業大学の学長をしている佐藤久夫君で、1票差の辛勝だった。さすが最近是对立候補が立つこともなく、時に寮委員会の成立が危ぶまれるくらいであるが。

そこで少しでも寮の伝統のいい所を伝えたい、若者の元気に触れたいということで、寮委員会が交替すると同窓会の世話人が新旧寮委員を中心に食事に招き交流する。前回は昨年12月に行った。因みに現役メンバーは山本篤(95年入学、広大付属、広域科学科)、杉本洋平(95年入学、新潟・国際情報、基礎科学科)、西浦智幸(98年入学、府立天王寺、文科2類)、砂田真紀(98年入学、兵庫・三木学園自陵、文科1類)、計良曜子(98年入学、佐渡、文科3類)、上原毅(98年入学、鹿児島・池田学園池田、文科2類)、高橋和央(98年入学、愛知県立一宮、文科1類)、高原光示(98年入学、熊本、理科1類)、力丸健太郎(98年入学、福岡県立福岡、理科1類)、Scurr Vera(98年留学、ニュージーランド)と女子が2人、内1人は留学生と、現在の寮の構成を反映している。出身高校は広大付属、天王寺、熊本等は伝統校であるが、新潟・国際情報や三木学園、池田学園等は新顔で昔と大部様変わりしている。

6月で寮委員会のメンバーは変わり、新しい委員長には前期の委員の砂田さんがなった。初の女性寮委員長の誕生である。6月に寮祭があり次回の交流会は10月15日(金)の夜に延びたが、中野サンプラザのパーティールームで行います。都合のつくOBの方は参加していただければと思います。

## ◎榊添君吠える

今年の寮祭では国際政治学者の榊添要一君(S42年入寮)がメインゲストとして「学生時代に学ぶべきこと」というテーマで熱演。かって私がデモや集会に行こうとオルグしても我関せずで勉強していた彼に相応しい演題である。それでも寮で先輩と議論したことで知的刺激を受け、議論するために本を求めてまた勉強したということで、覚え立てのマルクスや毛沢東の理論を振りかざす1年先輩の私と議論したことも、彼が現在あることに少しは役立っているのかもしれない。

かって駒場の教授会で対立し評論家の西部邁氏(S33年入寮)と一緒に教職を辞してから初めて東大の施設を訪れたという彼であるが、共用棟のホールが狭く椅子も70脚しかなくて学生や三鷹市民が立って聞いているのには立腹。OB会もことあるごとにお願ひしていることであるが、映像施設や舞台を備えた大ホール、図書室、浴場、食堂等の共用施設を早期に完成して欲しい。駒場寮の廃寮と引き換えでないと予算要求できないと言うが、もう何年も同じ状態が続いている。毎年20数か国からの2百人ほどの大学院生が寮生活に不満を持ったまま帰って行く。彼等の中には帰国すると直ぐ指導的立場につく者も多い。良好な勉学環境、日本を理解してもらうための交流の場を作り、親日家として帰ってもらう、併せて日本の学生の国際理解も深めることは、下手な軍艦や戦闘機で身を固めるよりも日本のためになる。

ところで今回は世話人の他に武田善行ヤマト運輸専務取締役(S35年入寮)や太平洋セメントの相沢健実君(S46年入寮)等も参加。小金井に住む武田先輩は娘さん2人と孫の4人で参加。途中中断を挟んでようやく今回が復活寮祭の3回目。アルコール抜きなど少し盛り上がり欠けるところもあったが、いわばOBにとっては年1回のホームカミングデイとして、OB、三鷹市民、留学生、寮生の交流の場として盛り上げて行きたいものである。

### ◎短期予測は当たるようになったが

9月17日(金)の三鷹クラブ27回講演会は久々に理系の滝川雄壮気象庁長官(S33年入寮)に「気象予測」について話していただきます。滝川先輩は気象庁に入ってからコンピュータによる気象予測を専門にしていました。この夏も熱帯性低気圧による集中豪雨で貴い命が失われ、世界のあちこちで「異常気象」が生活に大きな影響を与えています。「短期予測は良く当たるようになったが長期予想が当たらない」原因や最新の気象予測の問題点、さらには地球規模の環境問題などについて解き明かしてくれるものと思います。

### ◎最近倒産事情

28回講演会は11月26日(金)です。10年に及ぼんとするこの長期不況で山一証券や長銀などを筆頭に多くの企業が破綻し、沢山のサラリーマンが巷に投げ出される一方で、会社は取引先を巻き込みながら法的に処理されて来ました。又、経済のグローバル化とスピード化が進み従来の破産手続きでは時代の趨勢に合わなくなり、破産制度の改革も進んでいます。

そこで、三光汽船や国際航業事件など多くの破産事件を手掛け、現在も破産案件を沢山抱えるこの道の第一人者桃尾重明弁護士(S35年入寮)に「弁護士から見た最近の倒産事情」を話していただきます。株主や経営者として、社員として、取引先としてどのようにして倒産から免れるか。万一倒産に直面したらどうしたらいいか。又、倒産制度はどう変わっていくのか。大いに参考になると思います。

講演会はいずれも6時開場、6時半開会で会場は神田の学士会館です。食事、ビール付きで会費は5千円。終了後近くの中華料理屋三幸園で2次会を行います。会員以外でも興味のある方は小生まで御連絡下さい。

## ◎局長になるのは難しい

国会が延長され今年は遅れ気味であるが、例年6月中旬に国会が終わると高級官僚の人事異動の季節である。6月末から7月中旬にかけて順次発令され、事務次官を頂点に局長、次長あるいは審議官、部長、課長、室長と裾野にまで及ぶ。キャリア官僚であれば課長にはなる。大臣官房の人事・秘書課長、総務課長、会計・主計課長の所謂官房3課長や部長、審議官、局次長などの民間会社の取締役級に当たる指定職になると個室を持ち、給与や退職金がだいぶ上がるが、出来れば局長にはなりたい。実績と能力に自負するところのある友人諸君にしてみれば、当然期するところではあろう。

私もそう思っていた。局長なんて俺でもなれる。物心ついた時に親父はもうずっと前から局長で、局長しかやれなくてと、自分も人生で置くことを知るまでは内心小馬鹿にしていたのだ。ところで明治の初めから4代続く田舎の郵便局長の我が家だが、明治から4代も続くのは珍しいらしい。ドコモ守口ビルのカーテンウォール（高層ビルの外壁）の営業で関西ドコモの金光社長（S30年入寮）にお世話になった時、郵政省時代に郵便事業百年記念で明治から続く郵便局長を表彰したんですよ、お宅も入っていたんですねとおっしゃっていたが、高々4代続いて表彰ものになるくらいだから郵便局長もなるのは難しいらしい。それでは本省の局長になるのは桁違いに難しい筈。「局長」の親父や兄と一緒に暮らし、大学や寮では将来の局長候補と議論して負かしたり、負かされたり、一緒に酒を喰らったりしていたものだから、つい安易に考える癖がついたらしい。

そんな訳で本省の局長のポストを目の前にして駒場の中国語クラスや寮の同期の友人がこの1、2年何人か霞ヶ関を去った。近畿農政局長の岩本君は日本競馬施設㈱の監査役に、郵政大学校長の小谷君は郵便貯金振興会の理事に、近畿郵政監察局長の鳥越君は海外通信・放送コンサルティング協力の専務理事に、経済企画庁経済研究所次長の堀君は野村総研理事を経て離島振興センター専務理事に、運輸省観光部長の石井君は営団地下鉄の理事に天下りなどしたらしい。天下りという世間では目の敵にされているが、50歳そこそこで役所を放り出されて行くところがないのでは役人のなり手が無い。都道府県のように上級職で入った人も定年まで役所にいるのも一つの方法で、そうなると課長になるのが50歳近く、定年真近かで部長や審議官、60歳を越えて局長や次官ということになるが、それでは局長や次官の激務に耐えられないし、若いスタッフを繰り出してくる外国との交渉にも対応できないという。

勿論まだ霞ヶ関に残っている同期生も沢山いる。前号で本省に帰ってもポストがないんじゃないのと冗談を言った岐阜の森元副知事は総務審議官で自治省に帰り、運輸省の飛行場部計画課長の石山君は大阪航空局長で現場へ出、国土庁審議官の高橋君は河川局次長で建設省に戻った。最近警視総監が交替した警視庁では坂東君が総務部長で残っている。しかし、次官まで登りつめても数年すれば引退して外郭団体等に天下りすることになる。現役の時と違って職務上も時間的にも制約が緩くなる。是非三鷹クラブや、D-NET、GEN等のNGOで、培った経験や知識、ネットワークを役立てて欲しいものである。

## ◎少年無罪！中年有罪？

7月に県の小竹宮籍課長、運輸省から最近出向の米田企画調整部次長に時間をいただき秋田に行く。前日の休日に故郷八森まで足を伸ばす。朝ゆっくり東京を立ち、夕方近く家に着く。目の前に日本海が広がる。泳ぎたいが水のきれいな県境まで出かける時間はない。地先の浜で泳ぐことにする。受験に失敗して上京するまで、夏は毎日朝から夕方まで潜ってサザエやアワビを採り魚をヤスで突いて遊んだ海だが、生活排水で汚れ植生も変わり、帰省しても泳ぐことはなかった。だが時間がない、背に腹は変えられない。

浅瀬だったところには小さな漁港ができ、岸壁を歩いて水のきれいな白岩まで行ける。冬ノリが良くつくようにコンクリートを打ってあるので白岩という。昔その岩場ではモズクがいくらでも採れた。持ち帰るとオフクロが喜び、それが嬉しくてまた採った。だが、今はない。少し沖合に赤岩がある。ここではサザエやアワビがよく採れたと思い水中を見ると、大きなアワビだ。時間もないし、もう年だ、今更サザエやアワビでもないし手ぶらで来たことを後悔する。しかし、目の前に獲物があると素手でも挑戦したい。エイヤと弾みをつけて潜り、アワビに手をかける。かつての「皇軍」のようだ。金具のナサシがないと採れない筈、我ながら馬鹿なことをすると思いながら手をかけ、瞬間力を入れるとアワビが岩からはがれる。半信半疑でもう一度やってみるとまたはがれる。面白い。夢中になりアワビとサザエを山盛り採ったのはいいが、手ぶらでは持ち帰れない。漁協の組合員じゃないし密漁だ。子供の時は許されたが、中年じゃ有罪だ。泣く泣くサザエは無罪放免し？！大きめのアワビ4杯を海パンのポケットに入れて持ち帰る。

冷水にコンブを入れてダシを取り、薄切りのアワビをひたして義姉に水貝を作ってもらい、地酒の白濁を飲む。アワビはこれが一番だ。なぜアワビが素手で採れたのかと「局長」に聞くと、岩牡蠣の方がかたまって沢山採れ、1日潜ると17万円ほどになるので漁師がアワビを採らないからじゃないかとのこと。アワビも油断していた訳だ。だが、この時期漁師がアワビを採らないなら、入漁料を取って観光客にサザエやアワビを取らせれば観光振興になるのではないか。目の前の食卓には大きな岩牡蠣も皿に山盛りになっているが、自分はあの歯応えのなさが苦手だ。やはりアワビがいい。

## ◎終わりに

中国というと発展目覚ましい沿海部が話題になる。しかし、12億の民のうち7～8割が内陸部に住み、沿海と内陸の経済格差が大きな問題になっている。過半を占める内陸の民が沿海と同じ生活レベルを享受するようになった時、地球環境はどうなるかと思うが、それを拒む権利は我々にはない。環境技術を開発し率先して資源循環・再利用システムを作り、その技術とシステムを世界に広めて行くしかないのだと思う。

秋田でも大館など北秋を中心にエコビジネスを立ち上げようという動きが盛んであるが、能代山本地区でも本腰を入れたいものだ。大量輸送に便利な港と発電所があり、港には広い工業用地もある。公害を垂れ流す産廃処理場が倒産して大騒ぎになったが、最新の技術をもってすれば、クリーンに処理して再利用することは可能だ。D-ネットの会員の小畑大館市長に挨拶に行ったら、能代産廃の処理に県が23億円使い、大館で6億円分ほどお手伝いさせてもらったとニコニコしていたが、この際能代山本地区も環境産業に本格的に取り組んだらどうだろう。近々このテーマで能代山本フォーラム21の第9回講演会を開催できればと思う。地元の皆様のご協力をお願いして終わりにしたい。